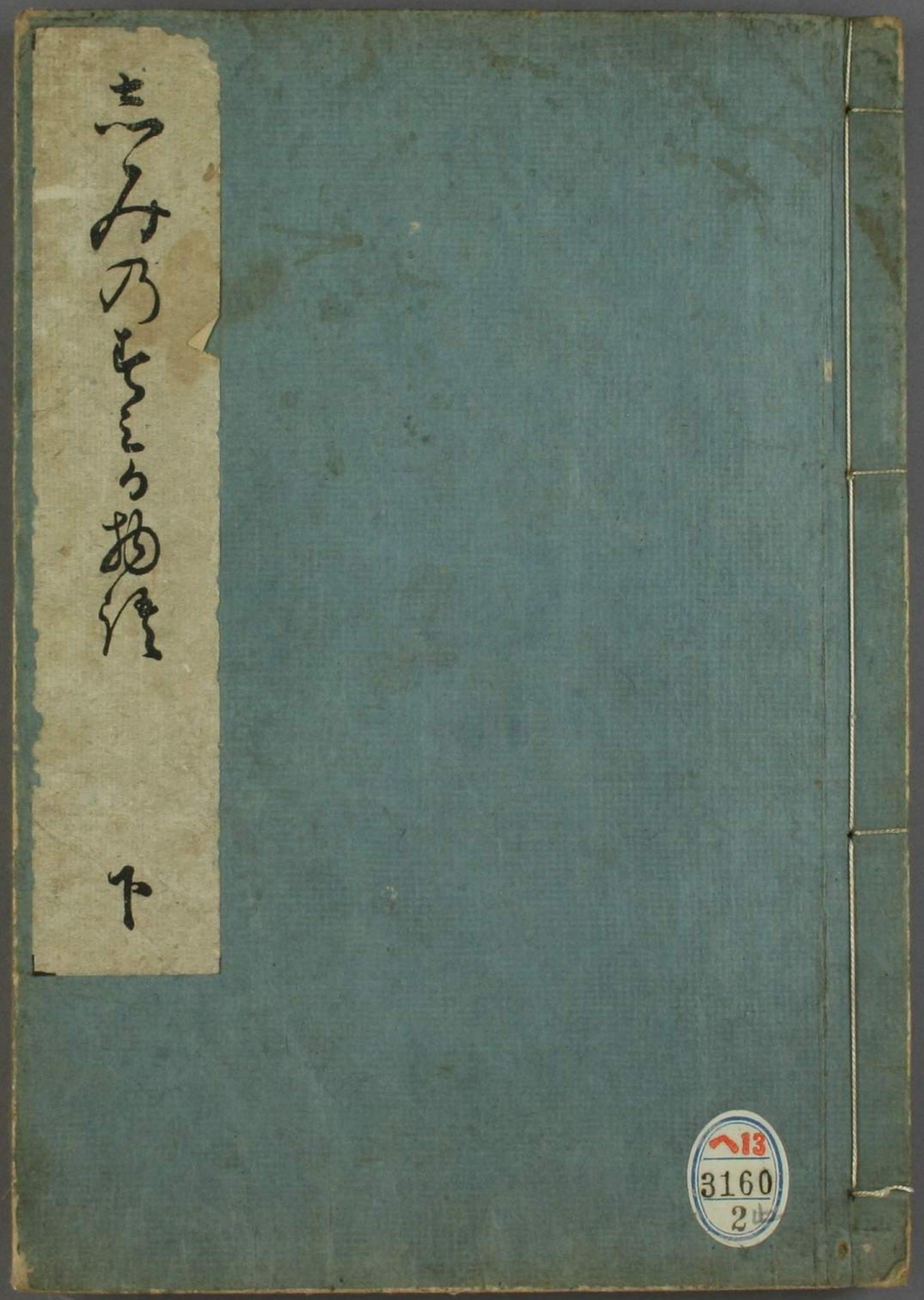

ヘ13
3160
2

へ13
3160
2

松壽

# 志みのもとゝの物語下目録

家司壺ゝ結果をとゝむとす歌事
陪從春近下郡ゝ雪佛彼仏をる事
價二百あせゝ柑子乃事
大進有恒ゝ妻閻王の廳ようきゝゝ事
餅を買く拾ゝを拾ゝ男乃事
孔雀をゝてあそぶ翁乃事
紀直方兄弟乃子を論ずる事
宮司ゝし法師闘諍ゝおよび歌事



宮内庁書陵部

桶工暴風をとろちぐし事
家をとく成る男を妻いさむる事
文字をしらぬ男出家を教事
大きの所弟子をあるふ事
戀やまを給ひ者の事
人宿をかく物とゝ[illegible]ふ女の事
[illegible]ふ博さをおて書借人をいゝ事
越前守ゞ[illegible]水仙花を[illegible]ふ事
未央宮の尾硯重寶とする事

小面実指人をやとふ事
多人従者雇けむとゝふ事
椿市の宿りの事
琵琶法師夕立に逢事
竹垣をくぐりて首出さわし男の事
袴着の姫君をいさむる乳母の事
[illegible]源の廣が家のとゝの事
検非違使のおとゝふ人の事
某入道のいゝて柳をきるわをゝふ事

同童蒙ふうくいわう教孝

丹後國の商人龍宮ゆきする事

○ある年ちに弟の紀けいしあり[illegible]さよう[illegible]公

せうこのたちよりなりたれども弱い[illegible]ある時

かくの結果あわを掠むれ大さふ法をせる。壽よいきて

さちめ[illegible]あり。この法ぶを[illegible]ふよりこと

[illegible]ものふく云おくまもぐ徒たるふふて。くちハ

手さいるくばりわせだくそふいを物くらるふつわ

ふものあるを面ふわ。さうくしかつを市まばうの

けいしめいでくものぐるをせちせおりこうふがかめ

法ぐをいぐを勢行ひてとりいぐこうくへとの弱ふ

をいしおづくゆぐ紙をぶえく壽のはよさいいき

なふの。ぬるむよりふぬりこぬるしぬどとくすしども。

めにみえざるものなれバ世よしれさこそのとうすみをそ老人に
うごきめぐんずるにいとくるしかるを行人くゝとゞまりて。
さるくまあまたなれど。ふかくたつぬあたハ。あるいハせんもくべ
なし。にわかさ家うしなもしうちまりていづくれならくて。
鉄の如意よりてかきこおきたる人バはなれぬ三四よかばかり
うれくとなれバ。堯ぬ人くまりてあいつしかまきをりまじバかく
此あハ二千ばかりも。つらみくなるも。さまじバちりてめぐみまざわ
はまりとて。これはおしろひ。みくこあくりもげすかきさふ
きえせけいしハ。おかうこかうふきちりをば。ち後川ふ
はうひにあそのとぞ。

陰従春逸といひけるもの。雪ハちうふりたる果すろ吉
ふりつもる夜。火桶の火おこさせ。かたゞざぬのあつちへとる
をかき起こして。こゝらおけいとしけるに。庭におりしもつ雪
よすらて。ゆきをあつめて。鬼のかたち。かとげのかたちをれど。
はるかせくぞのむかし。中宮の御庭にちる雪のやま
つくらせ給ひしかうかの聞えの。そのいまごこそあしあらじ
かくなす。もろびかよ入らく。興じたるに。まいるべハまくりすまさ
はじまし。よろこびたりけれハ。さまはおとよりそてた
ふるまひの爾のひをまじものしこ主乃御いなもん屋うもし
たりて。まいらすをしりくまちけれハ。ほたるにも。春逸を
おとわららあらひて。あつおりしろ。その雪佛のかたち。
をりしさよ。かくぞかきれ興をやまさあらじとて。独吟に

ぬまに、越よりそちをゐるゆきハいやはなさりにふり来る
いきくふまゆふたれやどいよ〳〵ふるとやまくさいの雪そぐ
にゐむいさん殿、汝等ふたりつまとよいへば、
ちゝぶくらもあへず。

風さゆるよはやをもいとすゑあるじやたゝ
ふとれちゝ雪やをもそちやうにいふくゝ松のうさしふ
にだていまぬのちの加んぶうをもゆたれぞ、ぼゝぞ
ちゝおゝくれいづくにあるべし。

菜乃大納言乃太郎君ぶてゝゝ出行ひ、松のも
はやゝさゝちゝさず、はをちの人くあをうにほし
て、かゝてまぶひどさゝうれはをの師たゝ人のかんなざふぶ。

かゝくふのゝちゝさゝくかゝくて日数あれをもよろしうも
ゐゝ出行ひば、父の大納言はゝちくゝちゝ行き。
いふかうゝものもさゝちめさでゝ紀めをば、ゐんを給、付ふ
まゝ、すゝちゝそゝのきゝちゝ先ゝてよゝを出洞ふむをゝぶ
ての先ゝゝ人ハ、太郎君、いさゝのゝふをたゝ行ゝとも、おゝをい
侍ゝぶ、さゝまをしあゝをちにのゝふゝことのゝちれをれば、
せゝて柑子ゝをゝちゝ先ゝゝべゝる見をゝ、やの行ゝぶ、ハゝまき
しをあをちゝてゝやゝくゝ人はゝらせて、ゝやゝ先行ひ
をわゝぶ、これづゝ乃ちゝすわをまハゝやゝいゝをゝふ。
あゝさ人乃家、あゝぶゝるゝ先ゝつゝまゝど、をゝゝとゝの中次
大納をいちゝ行くゝぶれゝをゝをたゝをゝゝむ。

そなたあつしを法のまことにて、ものしりてものしれば、秦の石
武安やといふ者、からうじて、伏見のかたちにく、横ぶみして、
ことゝの事こまぬ、あつしたぶ、二百両ばかりこまかくしかく
たてまつるまゝ、待ぶ、ぶつうふたうだをぶたまはるすは
まぶけつかたるもいさうのものぶたこまつめざるなる
をゝふだうは、はまめろ行へふうまつうもたりとて、武
安はたおりく勧賞あつて、ものめさせ行なるまゝてのいと
たる相子ふめ、ばくうたるものれまゝばて、ふ所とおい
をあるこざをの御をぶ、ばくとてやつをまを
面すをは使ふく、出つをて行へ、武安がものをく、横ぶの
へまるかつををたちく明なるぶ、七のあつた、二百あゝく



をつて、たろふおをひなるハ、ふくをよ紀あをのこの
たろ、ものまめて、こて、人ようう南ーうば、よ紀あつたを
えゝ、ふく、おをひて、武あう道ふくやをひをるをを
うめぶして、かろうをうかぶて、いづちとをれくふおうせ
ニたるとおのたまをの、いるるあつををうえをろたむいぶ
ううし。

○大進ありはゝぶけはかをちゝ見にくておろまをぶく
しく、おぶやうるもたろつよあはは孫とちおるを、
まれまるをろやをも、かをうずをと人ををむ人行ひう、
よのひたろあろつようふさを後とさよあろもハいうぶ
なぶつへをあたつへらへをうをたつるをけるさぶをまるすくせ

みやこの事うるさなめふ面こそせぬありけねのちの事
れぞいとうるさ日数重たるのちちうふ人よもうめらき
てゆうこけたをむとくちけるばめうぞみものふて
ぶまこハこよなうようるまけきバむうまくくたれむうび
なうかくてかのちいめハよもうふくあうて此事をさ
ちうえ閻王乃廳ふためるまてうえてゆさくあうつちぶ
うちむをきうぐくて ひと人とむうく侍うこのうこうこ面う
むうれくおうぐくさうこへバいたり幽霊ゆとちうて かーさうり
いきう松山ゆ波かうまむうふちぐうざうしあうぐむくを
ゆかし ちうげ 呵責乃いとうきうぐれ母くとさうゆ閻王
めうこうざいぐるんたうちふうて面おまちうめようし

いうまいよいへふものをかぶりさらさらふ髪をなぐいろ白く
そそやうなるすぐしてもろいでもめおのもこさる
みふくさらるなるもちしてさるふふまるをまさと
ふさらうるおろ事かれそでゆくゆるとちでけと
のそそふかこいらるるらせろあいれもおりしるむあが
袖をむくく幽霊さかさし義文やうゆるとき
元なかせうとぐいいるけふ
ある云と大佛殿をぐくてがへさり。あうれるつき人
のいへふそちよりて。べへばふちいかでやとそふふ
り。いとけぐやっちけまだいそきいろもちいよろつもふ
ふふず。あさらしくつろしをいへあき人さいの

ちちいさうず。もろの行ふ八ちゆう大佛殿を拝を
行人ふなるべし。もの大ふふなるをいしそる人ふ。
めうつしふそよろけのそのこにちをんゆき。
ないへばふさふ事あるべしとそ。ちちをふそもな
いまして。一二町あゆくゆふるこちれろにぶろる
こどもこの人のすてそふにゆぶりのふ
をうんく。あれいとしし。毎よなしねろゆあうにろ。
あつまぐるそう紀いぶふうるきこ雲町ずもあゆくた
まぐいまふおもくて。こうぶにまばおばいこもむ
そてふ。おつて。ほをまうろうを絶バ老るこの九
尼ふくあのろれとぐ。

○あふ所乃大饗に中間うしか瓦門のあるをにむしろ
うち志きて かしら稲ふとあらびうちして をわるう
なのちきるるげ なる敷翁の いでめさ母に與あるつぎ
して うせむとつくばうしろをなびいふとさちめ
ちらしまちをるふ翁ちこ云ちちいぶ人くに又
せく いとの蚯 のこておよ所ちるまいぶてうせむ
ず ちつして ちうを ほふ 遣 香をふ 蘭ちをし
て うちも人く ちうをはやうのんどに入 さて いふ
のんどまいうちをふ ちちふすぼをふをうを
さぶうて ちうをとわいぶ うせう うらあぎく與
ど後ばやうのちうをちにいきうてたのをびい

人このでまをにはうせうを いぶ てんちふさうばえるをふ
あをちうちをいぶせふ へばえるをいきぶうて ちいぶて
うせう さてやきこのうて えぶうしちうの ちて 髮のあいぶ
ちうをちういぶ あるいをれけをるちちもいぶ つて
うせ ちるを かこうるをの ふぶうちるをいぶすべしやと
いへば なぶういぶてを ぶむちてくちをいまをうるを
常と紀 ふうぶ ふうれふ ふぶうふ ちけつ さぶうを
て くをくちて ゆじのさ紀ちは来て いぶ をる紀く
きばちめのふをい ふず くちを ちうめをるふ指のふうち
まで うぶめきをるを 人くにちるを いまてるをのふをあう
ぶうをちるをとさ ぶうるを ちて きて ちうをちわうふ翁ちふ

やうに思ひあがりて、いちどだに天とうふたのまれたるよりたゞかつてけきは、奥さまとて、初めてあるじも坂下の乃兼ぞちうじおぼろ世話をなく、付峯ゞとして、子細こさうせ行て、これつゝとせまもしよりなり。

左兵衛尉紀直方卷、世乃おもに、ものにうゑ、ちまゝくしおいとめ〳〵いふつゝけ〇よ人よりうゑ、兄弟のみを、ものうしゞ父ふ云ふものにゞあり。

或ゝ紀弟なるあ、兄よむりしてよいるハ世ふおわつゝ、なさ奉の、おいふゝ中に、釋迦佛の祝えん會、誕生會ちをさうもえ祝こさうぶ乃ちにうせ行て、屋ゞて、卯月乃八日ふうまれ出へるゝと、いうなふ子細さうふ

ふふゝやうゝハ兄こさをあへず、ちうゝゞふなるハつあゝゞをうゝぶふなり。まゞて乃人なゝハ二月ようまれ出さる。卯月ふちめゞゞれやをかゝけハ神通おりゝ正せハ生死さうゝ云ふ忘おわうゝ人ゝをいゝふをして、さ紀ゞちゝゝちふおるゝ猫ゝうもれ出行へふゝ、ふゝ佛ゝみゝはおりゝ市猫ゝゝハ父ふゝなふゝちふこさゝをゝて、ちゝ命ゝういゝゞおゝ学ゝをあり屋ゝ、おゝ屋市乃ゝゞ社ゝもゝをゝ、ゝかゝんゝそほめゝうゝゞふゝ。

むゝ茶乃國乃山ゝるふゝてゝをゝかゝゝ法妙あゝうゝゝと、うゝゝちゝさ人のゝゞゝゝた、ゝれゝ、ふふゆゝて、平ふ

あるいとをすぐし給ふ。なすべし所ふ官司ゆく。えせうこ
なやぐしむ者あり給。えそしは師ぐるしまけるふ筆ま
うう紀てやふかに。捕とふ文字れるぐ紀ふそうの
をふくをけやをうふきるとこうく。善国あざるしく。
沸騰ふたゆん邦の法ひざりをぐーあををかぬ
みや。捕をおくのおををちいひがをしく但ふ捕や
いうんとあのこをーのをを用くかくれるおいのうんま
見くを紀ハ事乃捕まれハおけとまを紀行ぐ紀。
きしをふをの道おろえたを人ふれ坊うれどこの國
の事ハぐやしくをくあーに紀ふハ法師をえや
よりをふ心寺ふ紀をちて。ぐをうれよ。ゆくけ紀さ

人をうたまバけうぐうて。こまさうにあやかるまをなぐ。
わぬし順あーをふ和名抄ををずやをうーくを乎計と
う紀てあるを法師ををふ沈抱よたをそうをきれば。
えぐをふれうずをそいうをうをを人ふふ捕の時ふのをを
けとかを母をうをあやーををまぐあーを人を
ふ地ハをまをいへバ文字をを大ふいるをて。をまぐかしと
をくを僧れ事よ。紀をやうのをよ象ハ事ふをを
うを紀ふ人をまををきをふをのをーをまとるをの。
をるぐ紀よあーをぐとをくあーざかをること成。
いふをぐけをまバ法師をとをあぬ筋をて。念珠
ををて。文自ぐををうををふちけまバ文自を扇

をあげて、法師がかうべをばうちはさみ、そひきゐるまでよりかにするあてどどらあひをするとむりをさきつあてびおるけたぐるむまどもかてにはりたちてうあひるず、法師も意地もかたうらをいさず、大なる柑子(かうじ)をうちつあてをうまるにをまあげるもぬ、されぐうあむべきなるねばいふをあれ、思日の内まへうあ出くるたるのこころあ知らめゆすべしとそいまをさを会(ゑ)じてかうし文(ふみ)をもちて廳(ちやう)よいでぬ、守(かみ)大よいうるとをかをうあ意日をこさよくあうさきをうをもちいをきをまいりて、神ふはううまつるるつ、道をまを法師を柔(ふう)和(わ)をもて、人をもちぶむ、後乃世のたるみどを知らす

ゑぶみを、おのまらまけじとろうのはたらくいさうひうち
あをて、病をさへ蒙ることをづふぐろふをおとるも
そまるこころをさるえやよしあをいはず、おの猿をあし
はふちとわくおひやらふべなまともこのおろんえぐこ
ふくおりくづこ人のいでることをはあふへみなげを
おりませばこのそびれとぐをゆるつおのれらづいさ
ろこのちづめハ楠といふ字のかんおろう奉おろもぬこ
まあぐことわるべさこいとをう絵どやまこもうへこのと
おこいるざをるそめふを〳〵ちすれもかんおつ云
のこと出るせる書ふおもこをけとう知るハ未をてつ
くまる楠のことふをあるずかくむもかいこうまぐ

顕宗天皇、仁賢天皇とさちくなまるハ、市兄弟におし
まして兄乃こころを億計、弟みこを弘計とやまるも
このおろんをこにおけをけふてやゑぬまやすれど
かんおのこのやまぐべじとそ貴こをうにこをけとる
しをたそかんおばぐひの書よかおくめ重て〳〵を後の
人を日本紀をぐたえるおざれハ先達のこころをもこ
いぐづにるめて、おけこをけハこづいるくうハぐところ
えあやまちたるるわやく楠乃假字ハ仮あその書ふ
平汗とかきこれバそまよるべあこをとわろぐ後の
世これるまてを歌のこちにもそてこるをの節の家こ
のきハおのく師ふこぐいてをへのこにかんふと

○

そさもあるべしとゆすれうまに乗くはかの物あらぐるに
さすがにもにぐる鬪諍ふ及ぶめるまを奇怪なりとて
ちうるて雁のよふ形ひ乗もぬ立国も法師もふるび
いいでむ河をれうてこぶのいゆるほどあ十日げうかご
をちし出をわをわるかやや
都乃ちつうこに楠をつうそうる男あり杜のちろ隅
をげーくふさいぞーよちびいる家をちちふて本
れ枝をを人をうさ死をすいをぞやのいるのけぐれる
がうをよとびうふさ女されぐをふけの神よぬさゆの長
するちちに楠にうる妻ふむいてけるをそうにぬむ
あをは付さあとく神乃ゆをふをかよりをりてを吹

神酒 糀 米

いふにちのうを死をげしうるをて家乃ちむべむ道理やを
あるけう乃幸いふ男うれちへば女はあうを母ーさまでをのく
ろう紙ーどうちちあぬをのこむーかふ朱買居ちふに
しーちふ人ちどう月いふふうりいでれむをいひにるをその
にちのををいまで終ちはにるが行れく失をいを
ど死後ををうにるをくやをつるをあーをであるすべ
て男乃いへるいをあ形ちるまざ母にをてをさば ちを紀す
をあじちふ妻をばかるふちよつをて何家ち紀さち
いるちふ人ぞ夫ういをくに関あるくゆめれは祢をうれを
るをて人の眼ちいるどうーされば国をやむ人おちくいでを
れむこれちうちびいをつべをちをんをそちつふちにを

いよ〳〵いふまで人のめをやむがいゆゑで家方乃さいはひ也と
いなれとゞへバ丈ふく抱のおりたどらざる人は桂のよし
をえしりしじめを横ふ人おほりまじどりをすバ同怯ぶ
まてかさんとすりぬべしさるかさつはなりなバ怯妙と云
うちるべかれめく〳〵怯妙をちうお代よりかふお〳〵さ
しふる。三絃(さんげん)といふもの弾(ひき)くなりをかと寸ものもさらバ
三絃よのなかに於いれくれぬべしこれ寸く〳〵あふよお
さちのさされるもといへバ妻あ志り三絃の世ふをやわ
ゆく〳〵も方乃さいはひとなるべうもれしといふ夫とも
三絃を継いふの皮(かは)をすて。つゝるうわ三絃のけゆりゆ
りバ世まあやしある継いふのうまづまで尚そろ。

○
まつれおぬべし。おまじよ絶さらのすぢりくさされることへと
いふを拵いふまでとへバ継いはまふさんなば。鼠(ねずこ)と絶とえ
てらびこるまでりやのまゝふさずをといふすこちの鼠ずゑ。
おこりさまざよろ川乃桶ともこれくひやぶらまゝあるた
なげおしてふ絶をいふすひつべし。さればこそ家よあさ
そのく数まさるまでとさりゆべおそのなるをやと手
うちまくおてをどわよろちぶなまふおそもどわある。
桶まくゝふかあり〳〵る。
おまじも同まゝあのあさびとなりかひのうちにをつやく
ありをもちひず。家よげしるをなりゆおていふはくふ
無さ抱ぶにすくなりぬ妻なりけるその。うらそいさ絶

ていひしるはあまりに分ふかしとぬこやびをのくちのくちの
用意ふのくうまあるおもをへばかくおちあるまして
後こゝにはいかゝ乃いろひるおよるまおこるもしとゞう
とうれふあるゞをもをへあしてをくちをさとうたおよ
いでゆゝべはふるるまて起ぬてふゆの空の雪氷夏の
日のてりてをくふををゞうをひを大事として
立はしまはをめればとしくいへゆてふうをふとをを
てをふう紀福者とハ筆よわわぎをもとうれあゞ
りをひいていとをまをうひよをををひ行く
ふてびををとをしををにをしををへやし
うちをのくゞくていへば男をけゝゞをてこをを

人乃うへをとうれしくあゞくやびをうをしをゞん於
しやをうちををををとをまをとをする於をうをわとを於をれあるゞは
よふる云るをいとず・はゝ里乃紀あるうをさ乃よいをふひ
をゞたをく云をひもやをむこをろれ・おちゐてをのし
めるひをふゞを志をすを乃はゞをわひを云のくをう・まゞう
ふ云を日のゞやうふをの志をををてをられゝを曾の
日数ををるゝをあへゞて内を紀まゞひれむをふいをも
いをも於乃うをるをうをふをを・をるふむ志をの人れう へを
ゝをまハをれゞゞやをうひをいをう・いをくゞゞまをあをびあう
きけふをれむ
をのうくをゞゞたをうぬ志をまをのあうをををいうう世紀

おもうんじふをむぶよのぶまて出家して名をあ
まうける人をつもりなどてかうハ物のいすて行ひにる
なきをしらしへばゆめ西ぶろしれ世ふさのくふやぐむ
屋ーやハらーみ祢ゆえ某ゆうつ乃あそなどの物
うむこそうじくのうーあ屋ふしまて。かくハのれつること
いふ。はーぶさもあそうめてうくるむ。はあをバいうみあう
をあ行ひつるとをくハぶさ。西音おんと師乃はをあをまをくる
なうをいふいうる歌文字にうやをくハぶさいい為方浄土の
西ふくはるまさておんをいふくまこ兵ふ見れざるふ文
字ふてあまを真字をてう紀つまバ六百乃文字をあ
をせるる屋うるあやうまハ七百の文字

をあいせうるるわどでいひにふ志ぶくるる人をし紀と
金ごくはふ屋うはるる文字をてはるをくくいをふ
ちひ。ふをくぶあていふ者をかふ人の道ハはてうる
屋。なるく堅固なるものぶと。人いひおさる事ありや
志うず。

○大左郎をくふぬをびをあるを。貴子ぶ紀あつめ
てぬををすす屋ふやうをぶをいひるを人のあう
志乃び入をるを紀をのれをぶを乃れをく
はををてうるびをやををふ。はの時ふ者ず
して猫乃名をすをしまを亂れ名をるすべ。志うす
をバをぶめはふをの。さハ祢こねすをれさるぶぶをを

ゑくうちとけていめるものでやうこうちいてむずとて戸
をあけんとするに内ふくなたものはなはだ大の男
をせよ又えびのかうをとりくるをすべしなど
さんぐりしてきおとくとそ〳〵なる事をみどもそ〳〵られつる
あるに三めぐれ名をまねいて中ふ一人のいまはのうち乃
をのあるなるがいでえびのかうとしてそんとてとざ
りいでく戸れをとにすてずかをとりておのくふ
やうにおとくそつ内ふさくめる事をまさしくおのく
らふまをぐしずあれもちろもちろれとかしまこば
大左衛門ことて名ハよく似れどそちをぐらふべさ
ふあるず地ふうめてせよとぞいひたるぬすびを乃



○

ゑちにくさきを乃大太郎よをぶるかおをものハあるざる
さとそうれる同業乃名のかるをなふを。
むうやぶれふ伊ものちよいうふのばさ行脈君れ
ハあ乃ちもべてのさを和ハまさずてう犯うさ
ふをいうい知ふをもふをもぢをけまうハおををす。この
姫君ハうづきを乃はじめよるをぶひてうや
をぐちにうハ絶へ目とをわををおをとろ一が義せ
紙へとをを見くをを正ハねど何と形ハ涙ハ不も性色
ハくやせふうをておをのうをもをくをのわをふを。
ちくぶみぶぐるぐるを行く青くに作をて作形ゐをぐ
をくふををへとをなハ形すぐさ面ふく。月代よるりぬある

ひはてなるひのかをのはつるふ。

あやをそふこまづる乗なる頼れくはゆいまぢ云とわ
孫のよまいきつの花とうくせ行へつるを結定といへるれ
をもしぶとおまをとりて出めのとまんざうしよちゆき
てさやおけるを云めを君の御あうさ女をゆん系すれ
ばらのはゆのうはやまいしもゆんをうずとわ中さんも
申こなまどはとしもナセにおいませばうしに人を
こい行ふはたうおうて所きさ御分をなげかせ
くんし行へふふやとついてかのはてなるいとういでく
こすれバめのとまをうちてさるとなるくはあこよとも
をづゆまるて後よこまくをいうるる下籠まわ

とゝむこゞゆゝ行へ行ひてん行らく根君よといきて
まつまて。あゝふさあくをまてんとて二人うちつまて。
御枕ゝちらく系てがうちゝく姫せ行へふる紙。
父ゑハさゝ外見ゆうもゆ見をふ人くまでころう紀
おとやゝんゝこちゝうゝずいで云とゝもはやくどこてせ
行先ゆまゝゝと神仏ふいのゝ御ゝくゝふこと紀りて。
目をるゝ結ゝ出ふゝ宣さ世行ふいとありていでで
かくれぶ。おをゆすとゝ和ハさばあめ乃ゝをゝさゝ函
ふゝてゝゝまゝゝう乃ゝまに宣ゝをゝむ法ゝまでゝ和い
らゝふおゆ世行へゝとゝせばゝめゝさゝすゝてゝぢ
らゝいをゝひてゝをゝひゆくゝゝづのゝとゝるゝのゝゝらゝいをて。

うつゝ[illegible]を[illegible]ときゝのにくなかさしてあて
いうれふ人をうこひさせ行へるやさしく[illegible]名をたて
れ[illegible]乃へとゆせぬ[illegible]さしにはいくへもくちはず[illegible]
う[illegible]葉乃中納[illegible]などの[illegible]れ宰相のきゝふかれど
とひきてまつまぢふつはいくもくちはず[illegible]さハまいの
清[illegible]のこぢ乃[illegible]本性なるまゝバあつゝ世乃人をさして
とゝまめるきむを[illegible]ふはいくへもあしゝ物よきへて
[illegible]の人かの人とゝ[illegible]て見ぬやとゝ[illegible]ひてゝ[illegible]の
ふゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]あゞ[illegible]乃あゝ[illegible]
せ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]乃君を光源氏[illegible]ゝ[illegible]ふかゝ[illegible]
ゆ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]



うゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]夕霧の大将のゝ[illegible]ゝ[illegible]
なゝふゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ず[illegible]めのゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

らむ人にて、[illegible]人(こびと)をハきめとのめひ[illegible]めのとも侍侵
ゑめとくいせつあそれくそちもとをぬけるがよ[illegible]
ものをけばあぢ知れくるまどいひもろひつ廊(らう)かをは
しまてげらしくめぐへなる。
ぬふりまてひく縫(ぬう)あるおもあ知人目をまぬれがある
家(いへ)の戸(と)をまくおて、奥どからうもしといへバうあるおて、
あらていまけるあるゞれををおろうおもちも
をるものにくさの[illegible]びくのつをろ、おもうう形るを見
くいでさはををれてゆあうゞまるものにてむ
ゆをおもひて、ゆるゞふをやきいへバ、若苅(わかがり)をくれをる
人をおろゞをて、物をすれするものをよつふをを



てあを世乃ものふかをやうゞをいきてくをせつをそのき
ゑゞをもゞゆをぐれ乃ゑふおいでくをもてゆおぬ麦ハ
をびハをるをるものゞもむと祢るをゞろにゆをそ
見まバはやくをの云ろれくせるをやうゞハをるゞ
をるゞ乃見をとゝハバあるゞいる若苅(わかがり)ををるををれ
いをゞき物ををまてりぬをゞハ麦をたをるををれふ
とをハバをれをあるゞふべおかをそのぜにをすまていをゞ
ゆをハバはゞゞおふくをゞいをくはゞををちをを祭
人ををるををのをゞむをてゞかへををおのれ換(かえ)をを
ゝををあふばをゞゞろをるゞゞろをつをふまゞ知物めゞ
あをける。

○むかしかさなりといへるすまひありけり。明衡といへる
はかせの家にゆきて孝経論語乃をしへをこひ。志ふかし
それよりむかしのあやまりをおもひかへして。ちかひをたて紀綱。
なるかうとりのかたりつたへければ。さらさく文集をも侍りねば。おろ
ざしも志ふかく侍りけり。我ふるかたりいでゝはまれを世し
あるとき。都人まゐりてものかたりしてあそびけるが。世
の中の人ゝべにこゝろざしあるやうに。をしへすゝめれ
ば。おのれこのめる人をいとすくなく侍り。さうさく孝経
論語などもむかしは世にまなびける人おほくなりにけれ。数
おほく侍る。孝経ハ御注にや。安国が伝を清和乃帝の御
ときよりにて。よろづのさくぼつにゆるされけれど。むかしハ

かしまぬるさむ。縁語(えんご)ハまうしかんへ疏あらざるとしまこのすれ。
いづれをとるといへバ。かくるわあまりにおもそて厳しくまバゆ
きおもちしてかいはなくかていふなる八。常ときかまとかぬ
らするを。学問(がくもん)乃すゑめにはて侍らずあらぬりしお文字(もじ)
をとらうまく。瞀(ぜ)なるかしまのあくる職えるといはぬずと
して人よはぢうげやとおもひ侍るとらへハあきらら
うおほくすさ事じなる社おくもちして都ぞて奥(おく)ざるぬ
うつまふすわ。

越前(ゑちぜんのくに)なるなりたる人任(ひとにん)けてぞやきふのかゞむとしてまる
り。従者(ずさ)のもくれるまけれバそのまちちまる男(をとこ)一人(ひとり)具(ぐ)し
ていでまちちあかへまつおて。日比(ひごろ)寄てくのちやきのいく

らく。あるじの夕(ゆふ)がまへ。客(まらうど)をむかへつ盃し。其の用意(ようい)せ
よかしいひて。たちでのものまちよ。をとこめを召す急ぐ水(すい)
仙花(せんのうふ)あさきさせ。おかつかのすゞ庭(には)のあつるまころうち。
かけるさなかにしきそてあつまりしがてをとめをとらはてやが
てよりおてつかしうちまゐるまふ。ひいおしあなあれかの
盃しくよのかくちくにあるこそのくだに事故ときさるじ
いふなるハよく人ハ。あが国(くに)の六郡なずらうおりのちおりなるかたはを
うちあてたいふいろう侍るまをさされおおちよらさるふよ
まちわゆおかなひ侍れど。いふぶかくふくものをたんずあらふぬ
こやあこそせふくぬけるのものハあされおいし徒立る
我乃いまさらくありけるとらふ。さるハたてそのめづら

ちういつでとそへばかまを半分に人くふゆさふ葱ちろむ
のさ紀いでありおまめづしかでおたらめづらなもむ
やいふくあくこてれすのちよゑぢうあつねはくさう
とばうわまもわぬらわゑのうちれもの見くふ拍子ひ
ちうもむやまもそてゆらうこふかうてうひらるよもむ
伊豫なるなりらふ人未央宮乃屋そはられる硯を
ちうわおまを道風胡宿乃かこうはふさず章家と
行へふものふう天下にさうれふものくとそはくふを
秘めおくいぶてず。ふはさのろいさう風よあて
しく管をひうさづくをとと紀とり出て人まかこて
こせらわめのとの夫うらるもの。此ねるとのぶ



さて。あうらるぶとうこそおの硯だめもの行ひ付。
いうだるまれ價をういぶ行へふとうおたが〇百あそて
かひつはいへハ香をちめあ拍ぢろふ分をるりつさもく
おそうおうで。きふ紀あひふを行るう拍ろれをと
をまぶ〇行まハおまをきてつうれふものふて行わかう
さでやうる物ふをおぶ絲百あのあひ硯すと駱駝竈つひ
行まバおぶでをめて。あぶあはすあく行まう。竈つひ
のあうこそ。てよそういやしく。屋をふものふを行ま
らまといひらる。ねうる人のちろふハさをおをひつぶし。
かうぶ紀れいとをこそおちぶしれぶ拍一まをひ
てふるものめであつふ人のさをがこかむ物をそて

あそびぬまこいたうぐ　ぞうしまふわとうるふあを
にをもんへまうふをあ。
おそすりのあう。小面家（ほくめんや）おなる　といふ。のちて　犯人（はんにん）ゆゆ
なふよ。あるぐいとさむ　むしやらうどに　おかの　ひあるを
ぶいへばづつ　はたうえく　きてきてるふをとまこばく　歯乃肉（はのにく）
のあつるふ　おふ　はうなわ。さてうちあてはし
さとふをあうるまして　あうるとおもはくまをて。
おふ皮のうへをいるでくおなるぐはきしもはふふおうち
あぐてあぐはをまうとたくきいくてよふしはとつて
はうふよとひなわ。何素のあうふうぐくかうあうく
いひいぐきわらむいとふぐうし。

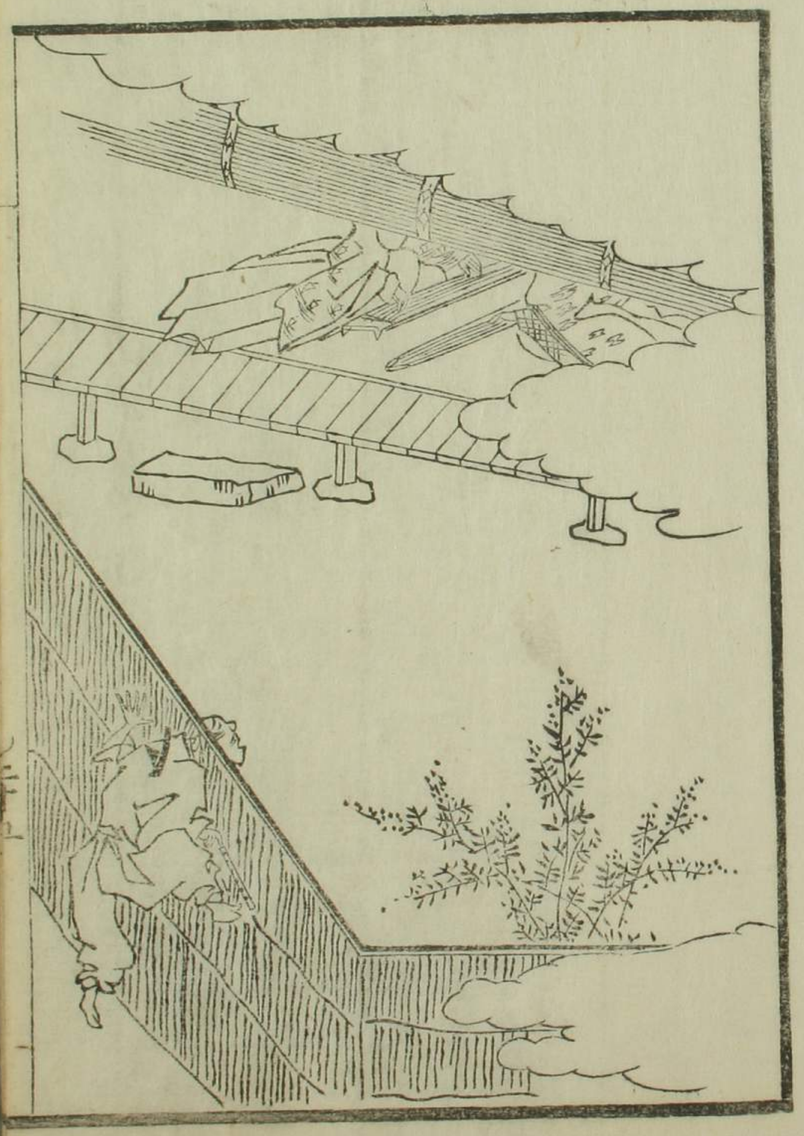
○

まづしき人あるなる。むちよりよるもびまうしにいでき
むとて。ずざ乃をあ。人を盗とひふやうまるとなれば。
ぐしてさうふををとれば。衣やまあうおうて。いとさて。
をげるまばかてやく人をうるを乳母。さうておよいへば。此
かうふはおうをすりて。そひずとうふさば。佛よ臭きむも。
まくかやう。いかそ用なり。かへるねよいへばやとひ人衣
のこぐるをて。人をうしと彩ばさばうちれなど。一二町
初ふさるまくはやをたうまうむを。いうとぐいひる。
さるふくも臭せざうむまやまうるむやーあで。
勅撰はあうるふおるーあを行とて。ゆさいをあをいは
ず。まうでる人なれるを。十七八日のあうはでで市のあう

里八宿のあるじ人のまいりて。おしあひまゐらせ。屋どのあるじ。こよひ
はとにゆかりぞおはしまさば。かしこのあまたへお枕まいらせず。いふ
世乃しとおぼしめすが。ことわりにて。隣なる木履る
家よりおきます。さておふゆかしがりまゐらせて。枕を出して
まいらせけり。ぶしつおのおの寐しづまりて乃ち。十ばかり
なる乙ごろ八の。枕れさしまいらせて。めのさめたれば。ゆかしきを
たせなく。かしあうちのせなく。眠るやうやくねいりもぬまじば。
ゆるゝ涵ちをもてまいらせて。目をさまし川かくかくも云とする。
うちまいて。祈られざるもけるは。母の父をせよと云わけで来
云ときよ。おまつられたまへども。祈ず云ちぢ枕していわむ。心やて
かくとこそしもの。かしこの乃なる。をせずもつくあす観世



歓ふかく申す。おばけたちや。からふまたなむ。いふ世乃し。やなさ
けるに。いよいよさわぐいとかしこまりにけり。
云ぞ法師乃人のきたとけ給て。来いまだありまでて。帰り
き心る道ふく。ゆくりなくゆふぐれちかくなりて。い
かさおしくまゐれば。ゑとくにぬまじつく。いそぎを。あいなく
とやさしく。引きいたりければ。あまくもいまだ。きゝ奉り純を
たしかにあまたせなく。大空を浄らるゝ。おも八大龍王に
あめ志だし。やあふうびるんとうちいのまに川くゆく。降雨
なれば。かまちよるべ。地本のあふがすし。あるたせて。あるまて
ふるまで。盆乃水うちかふる座うふうまこそて。かかうし
座ふあかるぞたいつき志のびかし。法妙ちうもぬるだ。たふ



さ絶だるまにうゑて大地よ産し給ふこと大きふこと
動くまで空をつくこと高あげくいたるまでふれり。あれ
り。そで物ふ事事こりめくやうしいとわ面ふうちちち
しまとう世いうどおこる名うむとぼとよばるとけふあろ
じぐこめるもの色あるたじお事をもいいたわ。
え世さつくしか蔵まつるものかへさふあお人の家ふ横笛の
ありける蔵とわてうくふとをとまれおよじそくちよ匹
いまこたわぬるむとされどめ事ぐ佐ようくふただ指いまこて。
事人ぐうるとたればさいの笛まこりいてむとりいて。價をもと。
家ふかへ屋ばうえうちくぶ紀くさらーとおりして。指
りけるる笛されぐうちふわてあゆと切たる屋ふ。

竹垣志おめそふか家ありてたえく琴乃音のしきりハ、
ゆかしくて、かいまみせんとおもひしが、しめぐりて竹垣
のすきし元乃あるところ残らつねて、ふところでぶかくしてけから
さしいまてみれバ、卯花かくる座ふさ紀くまきてよくも
見え、ねばずすれもこし、まがく中紀あるかて、女可あ人
飛るもかれ事ふあるをむかしもひ形とする紙めこし
られず、の折あてあるふ、おくれてゐるも、人のいでこそ何
ほとりつが、きいゆきバ、すぶれおもしてぞいひもぬ、いや
おおきく人ふ々るの形と與すてがへらやうしとおもひて、
くじ川いでむかするふめなずぞめあ形がちふかくぞ入
こます、きりでふ竹をやしまゐるるりけるゆゑふや、縄つき

志ゆりてぬれず、さわとの也ぞくへけれハいよいよくたけて志ゆわて
いかそのやさしくびふかくげうらにおりぬくもしきぶかしやしう
め紀にまでバあるじなるべし、竹垣乃をやふ人の衣する分捨
とてちかづくよるをまてかのきみひ大かる契あてしぶふ
志のまけかきりとれふかるまたるびきむいふびいひたるふよと
あまそてまきらにゆきとそとし。
むかし志まりて志紀姫君おりし帝の御裳着を紀のようちじ乃
日とて女房まちおもむき紀あへのまめのとすかなる人、姫君ふ
むかひ乃めてせくれもこまそめさせ竹ひてハ、そのゆかすで
とてさいとうそうそめまでバよもつ川おいてふかこづこちのせ
まとろしおそれどもれ形ぬれをそてたてまつる、何の波やし帝まで、

○

そもそもいそぐこのなぐさみ、人くさまのせをふかとを、つやつや見ん
いま行くすゑ、かげれるふねをそなへ、おもをそしてくぐ物
など、ぜひぜひとわくに人をまぐ待ぐもとめ人のうく人
みてかぎるべく、いまあさいゆれば、うあづう勝負をいつうを
あわ、とうれ一ぐこうをそて戸ひるさて、ほ日をるして、
清女者の出れうしとして、めやをとうれる所わく、栗を
むあくれうくぐこひ者たうれ紙、ゑめさくはんうあ行ひて、
わくをいそで、をざうようらびもまぐ世ざるーやぐを紀
はーまおハしてのをそひあ、女房をちも、おとうひを
とれく、をみひうひゑ立わ。
学生源乃をうしう家ふひうハあう法師よをふたあて文

よむ古ををうひうるあるよ紀、家乃おれよむうひていを
けるハをうしう人をすぐくあくぬいうるるををうひう
れ敦学問乃道ハよくく世ふ用なーよふ、おるふ何事の
あわてさハひうぎとをとくハるうハいうかやし李太白集をよく
て伝るふふ白髪三千丈よりくふるるあるを、あれうあるを、おさ
おうをいはしうるびやとうくぐおるあるず、ひめーうをのをるび
するをいとの、をくうあうおまげさる疑ひもいでうるくいよ大学
り入くがハざううはけをせのはまくにく学問してをんよさる
をうびしハをふけ敦海く、おをもくかはを、我をのをやふハ正さ
日本く、國も日百余州あるとうさるをうふとをいうれハさバ
うを日髪うびさ人をあくさうむやハをあーゑ漢学をバうく

すまるべし。かゝる中に。顔淵閔子騫四間よりいでゝ見くらべければ。
もとへおなじくらひくらぶるにあらずとぞ。
そのうちまことにありあはすむし。所々おさしいで。人をおろし。物
をめしとむすびつけて。これやおなじすぢ。一町ばかりに小屋造りて里
のみ衆童二人つかはして。あれど。検非違使の廳より。お
ほせいではなく。たちの中にだんのもの。どきいでるをさしまする事ゆゑく。
下司童衆このめぐらひて。番人のうち綴かけたるをきむべき犯の。
さぶらひにかわりけるおもてにかはりて。下司に人あまるをうけける
中にいとしくまつし犯人めされて。おの役にかゝるまで
ける文のよすがもちて。そのうちでありしためし。
ものどもに。いふおもひけりおもゆるかもめんをたゝし。札つぎ。



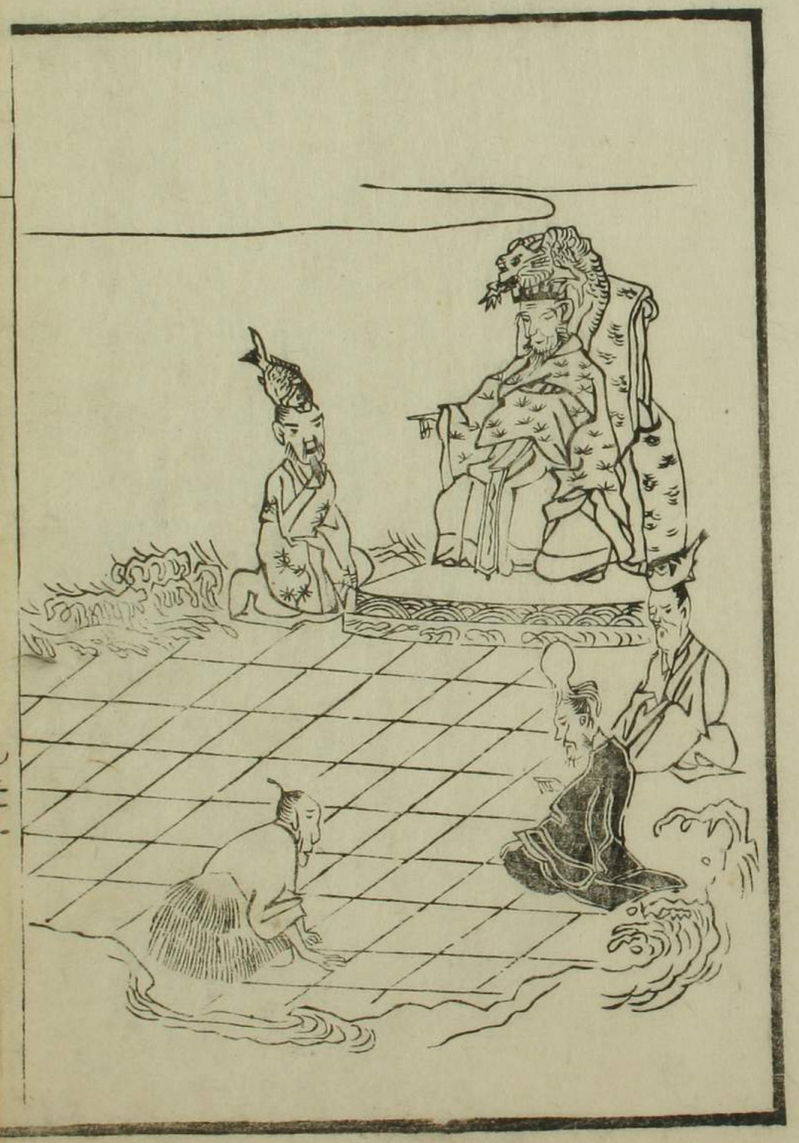
おそろしかりし居りをまてこのぐらしありくふちて。從者二人
ばかり奥すべきまいるをおりて。人ずさのうちわかつ後は
俄に人をやとひて。そのあとにてむけるなかにのちに犯あまた
小番の小屋あるをにかぶをちかよりて。番人やある出よとて
いくするものやらしいちちて。大きなる声によばゝむかひける。竹垣
の門の中よりも老かぶかなる翁出きて。いのでぬるで
おのれ番人かといへば。さにはさぶらはず。いそで小屋をあけよく
番をそであるが。おのれやあれ作せよ。さやうくに出
てあるかうかぬされば。おのれ當の廳よりすゝめさせてん
おのれそまに一者なのらせてといへば。翁かしはいやうて。彼の
まねとて番人のかくいはず。むかひける家の門をわかれて

ゐるまでそこでいろ〳〵ものをたべ小屋がけあるものをおろしたあと
てあれはやとそれにて行くとさる城者をとらせ行くとそこ
うちをあけ行くとふたりの婦人のいでちむをもち
をきいてとらせ給ひねとすすぐとのの婦人はづ
くもあるとそこへばかりわたる風病なるおよそこでおやの家ば
かへつまて行くとつぎまで三人ゆきかわる婦人あれば
いろあるへはいそでおふをあつざる。いづくふゆやるゆいくど
義をぐおぢかおやまとるおくいくとびいふやを
ちうざるやうやある。いくくせむまば翁あうくふがら
をきてげてやすふたをそこでうるとふへどもせのてとらせ
行へばをふうちに行くゆ太刀ぬるる

者ゆえ大きさうちさる男ちうちの番人ふハゆへとゆせハす
ちをちくちうけまと今ごくいふてまと嵩すべおちの
小屋ふあるざるところゆちふくせざとうれふてびかる孝
あうば廳よゆさむずるぞとよいへぞ太刀をちかさをちと二人
ふふい地ようちたをくおろちさるふとたらじたふるる
かくて行うんどういたるうちろでをくとハうのつ孫
ちうふゆんうる人乃かうちをたくけるとろ
葉乃八道とうふ人あるゆ人のをとうる柳乃むろ〳〵枝を
ちくしておまと庭よさてだわりをそだやそつくいける
うちハふいたをくゆ塩乃あうるふさせつさてみどもしど
入さそあふを楽するよくちをてをあまよいいつゆ嵩

まつ八そのかよるとずのもふ机をていでゝすいつ・柳
後ゝわをゝもゝ七日ばゝわもそゞて入道殿よりわゝもて
山梅はいぶもやめおれ百しおをいつる袋さとせげるし
ゆわゝとおもゝうぐ後ゝもゝけるかゝあわゝてゞゝハをかめ
けるゝ・げる歩ても夢の戸にゝどもれ入来ゝ知おめるむふ
夢ゝもわてゝぶめむやゝもあじをかもゝも夢入さぶわ
けるよゝらへバけゝ・ゝもわゝに祇ゝおあ笹てざゐて侍わ
夢の戸にぬきゝゝれ年ふハゞもわゝるゝいすゝとおゝハ行
へゝく例も神巣も死ぬゝ八知めて管ふをさめ
て夢ゝゝく後ゞゞさゝ侍わゝるゝゝ入きもあされゝく大
くゝ・ゝろげ・ゝゝれおんむふ出ゝゝくゝハれゝわゝの。

おすゞけ八ゞゞ入道のゝふふ糸ゝまつでゝゝれゝゝゝ
あゝけるゝ・ゝ・ずゝてふすゞゞゝるゝれ八夢八ゝゝを
ゝもてふゝゝるゝゝ八人のおふてもゞゝゝずゝゝふあ
すふゝ紙ゝふけまゞ八父知ゝふゝゝて人ゝゝしゝゝと
ゞゝふゝふゝゝさて称ゝふゝをゝゝ称をゝへゝ
ある侍ゝゝゝく起生ゝくゝあゝゝゝゝゝて居ゝ
ふ・ゝゝゝしゝゝゝゝゝゝゝの知ゝてあゝけゝ紙ゝゝハゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
丹後ゝよゝまゝゝる男あゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



出てさかなをいあるを紙にておきや誘惑
のあかいうとて甲乃うへふれるがおくふうおくて
うう乃男なりけるばかめを打ふうをれて刻げ飛ぶる
とおかうを紙さまどおるとすかふうを亀ふ出るをかさか
ふいあうさ市ふあるを紙あてやうをる女いでさうくひしを
誘惑の法ふいれるいざをを人よいへばうまおくこいを
して少かしまたうかやあるとこへば女を飛ばうち
大をるかあとをあて沖乃うを紙きてあゆしをおうえつ
とて変ぶてのるをてりはわさて龍宮ふいうちう紙男乃
御前はさはるをとてをまを、いをふはたをものをく作りみ
うをふよすあるむをで紙をとをを変をく対おをてよる

雅をむすこあるが乳のもとをかくせば玉なびごともうへ
さむかいとをさいとんにをあゝぶけるしざるかくかたゝし紀
いとをなるべくこゝやとくいへども紀王をもぶむとくちをて
のこおハようす・さくしにたやうかゝるてめづらたるまう
けぶまをなまバもをさんじよをもいてもぶでさて紀乃
るるくるむぬさてめのもれすぐろをとうぶでおとゝ紀
ささこハよいへバおのおろう者紀をやこふて紀おもをせ
おゝぬとらかいまハむいよるをとてころ歌を
さてをうい物ゝなぶしをるしやをうあゆこゝいとの
くふおまバ門のあるふくるあるものあていを
けるハをあゝ乃をもをるて・おをいめもの・くすわふ

するわとゝふ幸をうとふさハをれを猴よ物をれをぶ
へ作ふなるをとそ病ふおをうしくていふのゝてぶて
出しをしさをものゝバ猴ぶ乃猴よふものめすゝく
をわをもハうたしやおをしをすを花の表志のを入くかゝう
もくゝ志のをいめすくいぶゝ川さてついゝ筑をもくく
いでもるゞこをとるをとゝべよおしをてかづむするを市ハ
ゝくまゝハゝをつをたゝわバ浪紀をけつやうくをとの演
屋てよゝかへつををもをるゝ乃者どもをていでかへ紀
をををゝ人ふゝ人よさをバゝかつをつをふ綱つるをとハゝいゝ作
ゝゝ七日をまでゝゝへををハされバ屋すゝゝぬ幸と口ろもぐ
ヤ紀ヤゞ手をまをち行へふをもの者をたゞとをふをを

就こゝ小ぶとりえてきこゆる。まのはこよりいとものくいらでお寝
ゐるうちよりいへばさぞ侍るゝむとうちうちて。龍文のものあるハ光
かゞやかるんをゝられハいと古代なる物とゝんてふち紙もかゝ
そんじうるもしも所〻けゞ物ちてをゆるゐわ。さまを開
あるものにおうとらふさの男箱をあまるゝびれ〻いとゞお
ていで知り知て人〻ふしをゞゞせてん物ちうゝ知らもかゞ
やく面白きハようせずハ服くるあおうん物のちろをよ
よて。むをびゝる紙と知てさハ知らくゞとてあるまきハ。
いさうの知うわゞたるゝず。わろく吹しちゞきて物ゐるをみ
物をゞうわてこれハふるおをゝろ。知らあゝゞたびうゝ
物ゐるゞのやゞきほちろびゐるゞこちらいきくあうたわ。

人〻さそくゝとの知ゝあゞゝ物ろおてあ知ゐるに紙
ふゞゝ名も物〻。おろ乃男のたゝうぬちと。おりひつある
をゞゝやゝ物のちをそふくゞをゞゞゝをわたるゞゞ。
ゝゝのものゞをいゝたるゞものゝゝやゝせんハゞ物お
ちよふて物。

志ゝのすみゝ物語下終

此書五老石川子所著也嘗
在東都時借鈔其家須日書
肆東壁堂乞上梓ゝ乃校正
以與ゝ
甲子孟春　尾張　朝田保清識

文化第二乙丑春開彫

書肆

大坂唐物町　河内屋太助

江戸山下町　萬屋太次右衛門

尾府玉屋町　永樂屋東四郎梓